プログラム委員会報告

プログラム委員長 鈴木基之

京都会議が終了した今、無事に科学技術関係プログラムが進行し、初期の目的をほぼ到達出来たことからくるホッとした気持、準備期間中の実に変であったいくつかの時期を一つ一つこなして下さった委員諸氏はじめとする関連の皆様方のお力の結実を観る思いの感慨と、大目標の終了した時に訪れる一種の虚脱感を味わっているのは私一人ではなかろう。この時期に、色々協力いただいた皆様に感謝を捧げると共に、会議のプログラムに関する準備期間のエッセンスを記録しておくことが何らかのご参考になるならば幸いと感じる次第である。

1. 準備の開始…会議のイメージの確立 (1987年～)

種々の検討の末、会議規模としては参加者1,500人を当初目標とする決意で出発した。このため発表件数としては、水問題の重要性も考え500件（ポスター含む）に近い発表を集めたいとの目標を持つこととした。従来のこの会議の発表件数の規模は100件～200件程度であったことを考えると極端な拡大目標である。

プログラム関係の国内委員会は運営委員会、組織委員会の形成に伴ってスタートしたが、実際の第1回合は1987年11月に持たれた。

委員会は、表1に示すメンバーで、このほか、随時お手伝いいただいた方々もある。

この段階で、わが国の考え方をまとめ、まず日本側から準備するセッションとして、わが国の先端技術の紹介、日本の水管理に関する現状報告、国際水十年プログラムのレビューなどのセッションを準備するこ

表1 国内プログラム委員会委員

氏 名	所 属	担 当
大音 透	いわき明星大学理工学部	ICA ワークショップ
大垣眞一郎	東京大学工学部	Water Reuse
大久保泰宏	横浜市環境衛生研究所	Membrane and Adsorption
大村 達夫 (花木啓祐)	岩手大学工学部	Stabilization Pond
岡田 光正	東京農工大学工学部	Computer Modelling
金子 光美	摂南大学工学部	(Health-related Microbiology)
亀井 翼	北海道大学工学部	IDWSSD
大内 丈夫	通産省立地公署	
京才 俊則	建設省土木研究所	State-of-the Art
楠田 哲也 (古米弘明)	九州大学工学部	
鈴木 基之	東京大学生産技術研究所	Membrane and Adsorption, 委員長
田中 和博	下水道事業団	Large Wastewater Plant
津野 洋	京都大学工学部	実行委員会連絡
友野 勝義	水道協会	IDWSSD
野池 達也	東北大学工学部	Anaerobic Digestion
橋本 克紘	水道機工機	Poster Papers
早川 哲夫 (後に高木宏明)	環境庁水質保全局	
松井 三郎	京都大学工学部 環境微量汚染制御実験施設	Hazardous Assessment
松尾 友矩	東京大学工学部	Nutrient Removal, Math Modelling, 総務委員会
元廣 輝重	鹿児島大学工学部	(Off-Flavor)
山本 和夫	東京大学工学部	Preprint 出版
横尾 和伸 (後に矢木美雄)	厚生省水道環境部	IDWSSD
渡辺 義公	宮崎大学工学部	Biofilm

Motoyuki Suzuki

昭和38年 東京大学工学部卒業

43年 同 博士課程修了(工博)

44—46年 カリフォルニア大学博士研究員

48年 東京大学生産技術研究所助教授

59年 同教授

と、ポスター発表の形式を通じて最新の研究成果を伝達する方式が近年の諸学会の大きな因子となりつつあることから、本会議においても大幅にこの方式を取り

上げ、とくに言葉の障害を乗り越えて意見の交流が出来るこのやり方をとくにわが国の研究者の発表において重視することなどが了解された。同時に、従来IAWPRCの本部（国際プログラム委員会）においてプログラムの全体を決定していた方式から、もう少し分散（decentralize）し、例えばスペシャリストグループの主催するスペシャルセッションを予め表記し、従来の一般論文と並列でスペシャルセッション用の発表も募集し、スペシャリストグループの活動力の大きいなる寄与に期待することとした。

とくにスペシャリストグループの一つであるICA（計装・制御・自動化）グループは従来3年に1回定期的に持ってきたワークショップを一年予定を変えて京都会議に重ねてその会合を持つということで、このセッションのために1会場を会議の間振り当てることとし、このセッションのポスター発表も含めて論文の募集・選定・出版はこのグループが独立して行うこととなった。このセッションについては平岡正勝座長の下で、プログラム委員会とは大音委員が担当して全体のセッションとの連絡に当たっていただいた。

1988年2月にロンドンにおいてIAWPRCの国際プログラム委員会（2年に一度本会議のプログラム選定のために開催している）が開催され、同委員の一人として筆者も参加した。ここの中心議題は同年7月に開催されるブライトンの第14回の本会議の論文のセレクションであり、この作業はほぼ3日間日夜兼行の多忙を極めるものであった。この時には、265件の発表申し込みから102件（33カ国）の口頭発表と100件余りのポスター発表を選択している。

最終日に第15回の京都会議の日本側の考え方について説明を行い、会議の形式がブライトン、京都と次第に変化していくことについて若干の議論を行った。また、日本からのポスター発表の申し込みは日本の国内プログラム委員会で受け付けて審査を行うことへの了解も受け、国内の準備体制が整ってきた。

その後、京都会議のPaper Callも準備され、第14回ブライトン会議（1988年7月17～22日）において配付された。ブライトン会議の参加者は約800名であり、日本から約60名が参加している。

ブライトン会議においては国際プログラム委員も改選され、新委員長にP. Grau氏（現会長、チェコスロバキア）が選定され京都会議に向けてIAWPRC側の体制も整った。

同時に、国内のプログラム委員会では、論文作成・ポスター作成の手引き、発表会場の検討、ポスターブレプリントの日本における印刷の体制などの検討の外、日本側のスペシャルセッション、IAWPRCのスペ

シャリストグループによるスペシャリストセッションのそれぞれ担当委員を決め、それら担当委員は各自それぞれグループの外国代表者との連絡を取りつつセッション充実のため、また運営のスムーズ化のための準備を重ねていった。スペシャルセッション名とその担当者の一覧は表1の中に示す。

2. 論文の投稿の状況

論文の申し込みは順調を極め、ロンドンにおいて集めた口頭発表の申し込みは384件、ポスター申し込みは36件に達し、この外に招待講演約20件がこの段階でのロンドンにおける論文数である。また、国内におけるポスターの申し込みも143件に達した。

この査読作業は、国内プログラム委員会のいわば最大の作業であり、1989年秋には稠密なスケジュールでこの作業が進められた。プログラム委員会を中心として、また外部の方々のご協力をいただき、2名以上による査読が行われ、その論文の採否決定、また軽微な修正で採択可能なものについてはその修正の依頼などを行うなど、精力的な作業を行った。

初めから、ポスター論文としてIAWPRCに投稿されたもの(36件)は、結局ロンドンより日本に送付され、筆者の方で目を通し、問題点のある論文についてはその点を指摘し、IAWPRCより修正依頼を行い、最終原稿は日本に送付して貰うこととした。

ICAグループは平岡教授を中心にポスター45件、口頭発表54件（横浜において開催されたワークショップを含む）の準備を始めておられた。

3. IAWPRCのプログラム委員会（1990/01/15-18）

IAWPRC本部には、スペシャルセッション、一般セッションの双方について口頭発表論文とポスター発表論文とが送付され、口頭発表希望論文については、世界各国から登録された査読委員の内から5名の委員を選び、そこに送付され、その評価結果は、1990年1月15～18日にロンドンのIAWPRC本部において開催されたプログラム委員会（出席者：Peter Grau(前出)、Dan F. Toerien(南ア)、Helmut Kroiss(オーストリア)、W. Gujer(スイス)、A.C.di Pinto(イタリア)、Ken J. Ives(UK)、Motoyuki Suzuki(日本)、Elizabeth Izod, Paul Nagle, Tony Milburn (IAWPRC))まで集められ、その評点に応じ、さらに国際的なバランスを考慮して最終的な採択論文の決定を行った。この評価は厳正を極め、また判定の分れる論文についてはすべてプログラム委員が担当し読み直すという作業を加え、最終的に236編の論文が選定された。ただし、この内、スペシャルセッション用に依頼された原稿(20件)

については、別枠として取り扱ったが、これらの論文が京都においては華を添えるものとなっていたことは幸いであった。

口頭発表希望論文のうち、採択論文に近い評点を受け、数の制約から漏れた論文については、今回初めてのことであるが、Reserve Papersとして会議当日何らかの理由で発表できない論文の代役をお願いすることとし、また、その他いくつかの論文については、ポスター論文として修正の上、投稿いただくように勧誘することとした。

論文選定の作業、討議の間で小生がとくに留意したのは、従来ともするとわが国は研究・工業化の実力、実績と比較するとIAWPRC会議へは十分にその貢献をしていないのではないかと思われたことから、いかに主催国としても十分な発表枠を確保するかという点であった。幸いわが国からの投稿数もかなりの数に上り、最終的にはむしろ主催国の色が余り強くなぬように、海外からの論文を優先する配慮をすることとなった。また、日本で開催することから、同時に近隣諸国の活動状況もなるべく多く紹介したいとの希望も持っていたが、この願いは必ずしも十分に採択論文に反映されているとは言えない。

このプログラム委員会の過程においては、発表論文数を十分に確保したいという日本側の希望もあり、発表形式も従来のこの会議の方式である1件35分を30分に時間割を若干縮小し、同時に、Discusser方式を残すかどうかについて議論を行った。さらに、委員会の途中において日本（松尾総務委員長）と連絡をとり、会場数を従来予定の6会場からさらに1会場を増やすことが物理的、予算的に可能か否かの日本側での早急な検討をお願いし、その結果7会場のプログラムを作ることが出来たのは極めて幸いであった。この変更は、実行予算、実行計画に大幅な負担をお願いすることになったと思われ、そのご無理をお願いした諸賢に厚く

御礼を申し上げたい。

写真1は、プログラム編成の案が出来上がった時の委員諸氏の疲れ果てた様相である。

4. 本会議に向けて

京都會議が近づくにつれ、会議実行に向けての細部の打ち合わせは実行委員会（宗宮委員長）の側での精力的なご準備と、IAWPRC本部の考えとの調整の上に、セッション会場の運営の方法、同時通訳、セッションのコチエアマンの選定・依頼、コンピューターセッション用の機材の準備、ポスター会場の設定、ポスター会場におけるコーディネーターの依頼などの外、それぞれのスペシャリストグループとの連絡調整が進められていった。海外からのチェアマンの選定の遅れ、変更、論文発表者のうちから京都に参加出来なくなった者の差し替えなどは時間の許す限りギリギリまで進められ、最終プログラムが決定したのは小生のMacintoshからの修正打ち出し記録を見ると7月12日午後6時49分となっている。これからJCS（日本コンベンションサービス）のFinal Program作成作業に入っていたわけである。

ポスター論文については、前述のようにロンドン側において集められたもの、また後に開かれたIAWPRC本部のプログラム委員会においての選考過程で口頭発表から移籍したものを加え、最終的なポスター発表の論文数は219件（この外にICAグループの45件がある）となり、このプレプリントの印刷については本会議に間に合うように山本委員とJCSの努力によってきれいな形で日本水質汚濁研究協会の出版物として準備された。

最終的に、採択された論文の国別の分布を表2に示しているが、ここでは2カ国以上に著者がまたがるものについては両方でカウントしているため、論文総数は発表件数を越えるものとなっている。また、カテゴリー別の論文数とその中から日本からの投稿数の分布を表3に示す。

5. ポスター発表とポスター賞

ポスターセッション準備の過程で、優秀なポスターについてはその表彰を行いたいとの意見が出され、初めての試みでもあるので、IAWPRC本部の了解も得て、その準備が整えられた。橋本委員にその準備をお願いし、日本水質汚濁研究協会会長賞とすることとした。

プログラム委員を中心として約20名の方により各自持ち点10点の投票が行われ、高得点順に約2/3の候補が選ばれ、残りを次点群の中より主として海外の参加

写真9 IAWPRC本部プログラム委員会メンバー

表2 論文・参加者国別リスト

国名	登録者数	口頭発表	ポスター発表	ICA (口頭)	ICA (ポスター)
日本	975	77	156	15	25
米国	91	35	8	10	12
西独	50	9	11	5	0
フランス	49	7	5	2	1
スウェーデン	44	3	0	5	1
イタリ	36	4	6	1	0
韓国	31	3	1	0	0
台湾	29	4	2	0	0
英国	27	5	1	6	3
南アフリカ	22	11	5	1	0
オーストラリア	20	9	4	0	1
デンマーク	20	9	0	2	1
オランダ	15	7	1	1	0
カナダ	13	6	4	2	1
タイ	8	7	3	0	0
オーストリア	8	2	0	0	0
フィンランド	8	1	0	1	0
イスラエル	7	6	0	1	0
中国	6	5	5	0	0
スイス	6	4	0	0	0
ブラジル	6	2	0	0	0
ギリシ	6	0	2	0	0
香港	5	3	1	0	0
イラ	5	0	0	0	0
クウェート	5	3	0	0	0
ユーゴスラビア	5	0	3	0	0
ノルウェー	5	1	0	0	0
ポルトガル	4	1	0	0	0
シンガポール	4	2	0	0	0
エジプト	4	0	0	0	0
ハンガリー	3	3	1	1	0
ソ連	3	0	0	1	0
スペイン	3	0	1	0	0
チェコスロバキア	2	0	2	0	0
UNEP	2	0	0	0	0
バーレーン	2	1	0	0	0
マレーシア	2	1	0	1	0
WHO	2	2	0	0	0
トルコ	2	2	1	1	0
ブルンジ	1	0	0	0	0
キプロス	1	0	0	0	0
インド	1	0	0	1	1
イラク	1	0	1	0	0
メキシコ	1	1	1	0	1
フィリピン	1	0	0	0	0
チュニジア	1	0	0	0	0
ベトナム	1	0	0	0	0
ニュージーランド	1	1	1	0	0
インドネシア	1	1	0	0	0
カタール	1	1	0	0	0
サウジアラビア	0	1	0	0	0
ケニア	0	0	1	0	0
トリニダードトバコ	0	0	1	0	0
アルゼンチン	0	0	1	0	0
合計	1546	240	229	57	47

注) 出席者の無い論文は共著者となっているものである。

写真10 濱田会長より副賞の京扇を受け取る
ポスター賞2位の藤井氏

者ということで選ぶこととした。一位は西独の W. Demharther 氏, 二位は京都大学の藤井滋穂氏が選ばれ, それぞれ賞状および副賞の扇子を濱田昭協会長より授与された。この表彰はさよならパーティに一つの盛り上がり要素となった。

ポスター発表に関しては会議の期間中, 展示会場に隣り合って (ICA グループは G 会場前に) 設営された掲示ボード上に継続して張り出されており, 2 日目の午後と 3 日目の夕方それぞれ 1 時間のポスター発表時間がとられたが, その時間は熱気に溢れ, 通勤時間の新宿駅を彷彿とさせる混雑ぶりであった。このポスター発表に関しては, 分類毎にセッションを構成させることとし, そのセッション毎に 1 から 2 名の方にコーディネーターをお願いし, スムースな進行のお手伝いをお願いした。ポスターセッションらしく, 当日申し込みの Late Submission 扱いのポスターも 4 件現われ, 会場の空いた部分を利用して展示していただいた。

6. 口頭発表のセッションの運営

本会議は日本で行われることでもあり, 従来のこの会議が踏襲してきた英・独・仏語の同時通訳に替わり, 日・英のみの同時通訳を各会場 (3名/会場) に配置した。発表の一部は日本語でなされたものもあり, また一部の座長の方も日本語で進行され, 全体的には極めて順調な進行ぶりであったと思われる。同時通訳の方々は準備に十分な時間が取れない場合もあり, 必要に応じて, 若干のプログラム委員の方々に, 昼食時間, 夕方を割いてその技術用語などの相談に応じていただく仕組みとした。

また, 今回の会議においては初めてコチエアマン (二人座長) 制度を採用し, 少なくとも一人は日本人の座長とすることで会議の進行上に生じる連絡上の問題点

表3 京都会議発表論文の分野別数と日本からの発表数

セッション名	論文数 内日本著者* 収録巻**			セッション名	論文数 内日本著者* 収録巻**		
<u>口頭発表</u>				<u>ポスター論文</u>			
日本の水管理の現状	3	3	1	分析	15	14	P
河川流域管理	6	2	1	環境水質と制御	27	18	P
集水域管理	7	2	1	有害物質	21	13	P
受水域	5	0	1	生物処理-プロセス挙動	20	14	P
国際水十年からみた水質と健康	6	1	1	生物処理-微生物	18	14	P
健康関連微生物	3	0	1	生物処理-嫌気処理	19	11	P
環境汚染物質の有害性評価と管理	31	11	1	生物処理-栄養塩除去法	25	13	P
栄養塩除去	20	5	2	物理化学処理	23	14	P
栄養塩除去/活性汚泥ポビュレーション動力学	3	2	2	膜処理	23	18	P
栄養塩除去/大型下水処理場	7	1	2	小規模処理	15	14	P
活性汚泥ポビュレーション動力学	18	12	2	特別テーマ	15	9	P
活性汚泥モデリング	10	2	2	小 計	219	154	
固定化微生物	2	2	2	<u>ICA ワークショップ</u>			
嫌気性消化	18	8	3	特別講演	3	2	ICA
嫌気性消化/生物膜	4	2	3	計装	7	0	ICA
生物膜	15	5	3	操業と制御	12	5	ICA
安定化池	9	0	3	知識ベースシステム	9	4	ICA
膜利用と新技術	8	6	3	ケースヒストリー	15	2	ICA
吸着	5	3	3	管理	8	1	ICA
凝集分離	3	1	3	ポスター (モデリング)	10	1	ICA
大規模下水処理場	10	6	4	ポスター (操業と制御)	12	8	ICA
小規模処理	5	2	4	ポスター (計装)	15	9	ICA
工業排水処理	7	1	4	ポスター (知識ベース)	2	2	ICA
酸素移動	3	1	4	ポスター (データ処理)	6	4	ICA
分析	1	0	4	小 計	99	38	
スラッジ取り扱い	4	3	4				
スラッジ熔融処理	3	3	4				
排水再利用	20	3	4				
小 計	236	87					

* 日本著者共著分も含む。

** 1, 2, 3, 4は Water Science & Technology(全4巻), Pはポスター論文集(日本水質汚濁研究協会), ICAは Advanced Book Series (IAWPRC)として別冊

を極小とすることを狙った。各会場に於て、午前と午後の会議の始まる30分前にチェアマンと発表者にお集りいただき、打ち合わせの時間(ブリーフィングセッション)を設けたが、これに関してはIAWPRCの会議の慣行としてリーダー(指南役)を設定してその主旨を徹底したいとの本部の希望もあった。筆者は、コチェアマンの一人に日本の方に参加いただいているので打ち合わせも全く問題ないと考えており、事実大変和やかに会議が進行したものと感じている。座長役をお引き受けいただいた皆様のご協力に心から感謝したい。

会場によっては、立ち見がでる会場もあり、討論も全般的に活発であり、ポスター会場も含め、国際会議としての本来の目的は十分に達することが出来た。

7. 新しい発展に向けて

以上、二人座長制、ポスター論文の充実などと共に

会議ではコンピューターセッションが試みられた。ポスターセッション会場の一角に3種のパーソナルコンピューター(IBM, Macintosh, NEC)が設けられ、その他に発表者の持ち込まれたコンピューターも含め、口頭発表者、ポスター発表者が自由に利用できる体制を敷いた。これらの準備は岡田委員に担当して頂いた。

また、コンピューターモデリングのセッション会場ではコンピューターによる計算過程をLCDを用いてOHP発表で示したり、VIDEO発表があったり、興味をそそる発表形式が試みられた。

総じて、わが国においてもスライド、OHPなど発表を助ける手段に段々気を使うようになってきているもののいまだ手軽にヴィジュアルな発表形式が整えない環境にある。国内会議においても今後より一層この面での試みが必要であろう。また発表手段などと気を抜か

ずに、積極的なノウハウの交換もあって良いように思われたのは筆者のみであろうか。

8. 最 後 に

プログラム委員会の先生方は、長期間手弁当でご協力をいただくこととなった。委員会の開催回数は15回以上を数え、さらにポスター査読の期間、会期直前の作業の際には集まれる方々にご無理をお願いし種々の作業をこなした。これら委員会の運営に際して、大垣委員にはとくに幹事役としてのご努力をいただいた。

また、プログラム関係でのロンドンとのやりとりは専らFAXの発達に負うところが大きく、プログラムの決定の最終段階においては一時は一日の間に複数のFAXが並行して筆者とロンドン間を往き来することとなった。往復したFAXの数は総計80件を越えるものとなっているのも今となっては楽しい思い出になる。

プログラム委員の方々と共に、大変ではあったが得難い経験をさせていただいたことへの感謝を表したいと思う。